

Jin Qiu,

*The Culture of Power: The
Lin Biao Incident in the Cul-
tural Revolution.*

Stanford: Stanford University Press, 1999,
xiii + 279 pp.

や ふき すすむ
矢 吹 晋

I

「林彪事件」——1971年9月12日深夜から13日にかけて発生した飛行機事故で、中国共産党のナンバーツーであり、「毛沢東の親密な戦友」とも称された林彪が死亡した事件である。中国当局が事件の内容をリークしたのは1972年夏であった。一連の中共中央文件をまとめたものが『林彪事件原始文献彙編』（台北：中国問題研究所 1973年，増訂本1976年）である。

10年後，林彪・四人組裁判が1980年11月から81年1月にかけて行われ，事件のディテールが一部明らかになった。その後『党的文献』（北京：中共中央文献出版社刊 1988年1期）が符浩，許文益，孫一先ら事件当時の関係者の回想録として出版された。さらに『毛家湾紀実 林彪秘書回憶録』（北京：春秋出版社 1988年7月），于弓編『林彪事件真相』（北京：中国廣播電視出版社 1988年9月）などが出版され，事件の詳細がかなり判明した。旧ソ連の崩壊後，旧ソ連国家保安委員会（KGB）の機密書類が公開され，オーストラリアのフリーランス記者ピーター・ハナム（Peter Hannam）が，墜落現場から掘り起こした林彪の頭蓋骨写真をスクープした（“The Mystery of Lin Biao's Death.” *U. S. News & World Report*, January 31, 1994）。事件から23年後である。

『アジア経済』XLI-8（2000.8）

さらに5年を経た1999年に本書が出版されたが，これは文字通りの「決定版」と評してよい。評者は英書を読むのは不慣れだが，内容の面白さに惹かれて一気に読了した。林彪事件の真相のなかでも最も核心の部分にある「571工程紀要」（クーデタ計画書）と林彪の関わり，林彪逃亡のいきさつが完膚なきまでに明らかにされた。迷霧が晴れて実にさわやかな読後感を残す。たとえ悲劇であれ，その実像が余すところなく描かれたとき，著者の悩みを昇華させ，読者を十分に納得させる。これは林彪事件の核心部分を描ききった大傑作と評してよい。

本書は「文化大革命のなかの林彪事件」（サブタイトル）を主題とする。タイトルは「権力の文化」である。文化大革命当時に流布された毛沢東語録からして，「文化の権力」と錯覚しそうだが，逆である。中国の政治権力の上層部で演じられた政治のドラマを登場人物の個性や家族関係までを含めた中国文化のなかで考察しようとする含意を示している。著者は林彪事件に連座した4名の大將の1人，呉法憲空軍司令の娘・金秋 Jin Qiu である。事件以後，中国当局は関係者1万人を肅清した。著者の父は，最も重い刑を受けた1人（懲役17年）である。本書は事件に連座して肅清された被害者の立場から見た林彪事件の「もう一つの側面」である（序文，p. xii）。

II

本書の構成は以下のごとくである。

まえがき（Elizabeth J. Perry）

序文

第1章 イントロダクション

第2章 毛沢東と文化大革命の理論

第3章 中国の老人支配と文化大革命

第4章 林彪と文化大革命

第5章 権力をもつグループ内部の紛争

第6章 中国政治のなかの家族

第7章 林彪事件

第8章 林彪の悲劇

注，参考文献，人名索引，事項索引，写真12葉^{（注1）}。

第1章では本書の問題意識と課題が述べられる。事件直後の「中発57～65号文件」では林彪は単に(1)「祖国への裏切り者」、(2)「毛沢東暗殺を企図」、(3)「広東省に分裂政府を樹立しようと企図した」と批判された。いわゆる「571工程紀要」(以下「五七一」と略す)は事件の2カ月後(11月14日付「中発74号文件」)に証拠として追加された。しかし、事件から10年後の裁判においては、(3)の罪状が消えただけでなく、(2)「毛沢東暗殺」計画に対する呉法憲らの関与も否定された。10年の間に罪状がこのように変化したのはなぜか。

事件直後の「中央專案組」を率いたのは、周恩来、江青、汪東興である。1980～81年の裁判当時は、周恩来は死去、江青は裁判の被告席、汪東興は政治的影響力をほとんど失っていた。代わって裁判する側の席に座っていたのは、文化大革命の被害者たちであった。際立つのは江青の立場で、1971年には林彪を告発する側におり、81年には被告として死刑を判決された。

「五七一」は于新野(空軍司令部弁公室副処長、林立果の仲間)が書いたものだが、彼は林彪とともに墜死した。「五七一」を自供したのは李維新(7341部隊政治部副処長)だが、彼は于新野から「五七一」の話を「聞いた」だけで、それを「見た」ことはない。いわゆるクーデタ計画なるものは、その程度のシロモノであった。「五七一」では林彪が毛沢東を「B52」と呼称しているが、30年以上にわたって毛沢東に最も忠実であり、それゆえにこそ「後継者」に指名された林彪が一夜にして毛沢東暗殺未遂者に変身することは考えにくい。これが著者の問題意識の核心部分である。

呉法憲の娘であり、同時に歴史学徒でもある著者にとって、父親の呉法憲も、その上司の林彪もそのようなイメージからはかけ離れた存在なのだ。この矛盾を解くために、著者は既存の研究資料を丹念に調べ、呉法憲、李作鵬の未公開手稿を閲読し、関係者(とりわけ、林彪の娘豆豆、弟林立果の婚約者張寧、林彪の長年のボディガード李文普)にインタビューを行って、この本を書いた。

林彪事件の舞台は文化大革命であり、これはいう

までもなく毛沢東が発動したものである。第2章で著者は毛沢東がなぜ文化大革命を発動したのか、文化大革命とはなにかを現代中国史家・理論家たちの分析に依拠しつつ、その素描を行う。著者が用いた資料は王年一「大動乱」、龔育之「継続革命のいくつかの問題」、譚宗級「十年後評説」、葉永烈「陳伯達」、叢進「曲折した発展の歲月」、李銀橋「毛沢東侍衛長雑記」、権延赤「走下神壇の毛沢東」、李銳「廬山會議実録」、柳随年・呉群敢「中国の社会主義経済」、丁抒「人禍」、石仲泉「艱辛な開拓」、蕭延中「晩年毛沢東」、金春明「“文化大革命”論析」のものなど定評の高い文献であり、その叙述は手堅い。

第2章が中国の理論家たちの分析に依拠して文化大革命の理論を検討したのと対照的に、第3章では「中国の老人政治」(Chinese gerontocracy)をキーワードとして文化大革命を分析する。ここでは、中文資料のほかに、西側の研究が援用される。たとえばLucian Pye, *Mao Tse-tung* (1968), A. McIntyre, ed., *Aging and Political Leadership* (1988), R. J. Lifton, *Revolutionary Immortality* (1969), S. Schram, *Mao Tse-tung* (1967), L. Dittmer, *Liu Shaoqi and the Chinese Cultural Revolution* (1974), Y. Vertzberger, *The World in Their Mind* (1990), Roderick MacFarquhar, *The Cambridge History of China*, vol. 15 (1991) 所収論文、などである。

III

第4章では46ページにわたって文化大革命のなかでの林彪の実像が描かれる。いわば林彪派の内部から見た文化大革命である。著者は林彪の井岡山以来の活動を特に毛沢東との関わりを機軸に据えて、豊富な資料を用いながら描いている。たとえば林彪の負傷時期について、1938年初期説(スメドレー)、38年3月説(李天民とロビンソン)、38年9月説(『中共軍人誌』)など既存の研究を網羅している。ここで特筆すべきは、未公表の「呉法憲手稿」から注52, 87, 121, 131, 134, 161, 170, 173の8箇所引用され、従来知られていなかった「事実」を明らかにした箇所である。たとえば毛沢東が文革発動を決意し

て江青に宛てた手紙で、「林彪のクーデタ講話に不安を抱いた」と述べた箇所があるが、この手紙を66年にわざわざ大連まで訪ねて林彪本人に見せたのが周恩来であることや、「毛沢東の最も親密な戦友」というキーワードを初めて使い、後継者ポストを引き受けるよう示唆したのが周恩来であることも呉法憲の証言として語られている。さらに、こうした形で林彪の意に反して「後継者」に持ち上げられることにきわめて消極的であったという林彪の素顔は、これまで語られてきた「野心家」のイメージとは対照的である。この呉法憲証言を初めて用いたのは「実の娘」ならではのことだが、『毛家湾紀実 林彪秘書回想録』など他の資料との整合性にも意を用いた抑制的な書き方であり、説得力に富む。

第5章では文化大革命の推進者として林彪派の將軍たちの勃興が描かれ、第9回党大会から1970年廬山会議（9期2中全会）で毛沢東の意図と林彪派の対立、そして毛沢東の林彪派批判までの経緯が手堅く描かれる。

第6章では革命の領袖たちの妻たち、政治の場における妻たち、高級幹部を父に持つ「太子党」と呼ばれる子息の生態が描かれる。ここで特に問題とされているのは、林彪の妻葉群の役割と2人の子供、すなわち娘の林立衡と息子林立果、そしてその仲間たち（空軍の若手幹部たち）である。父親が高級幹部であることがその家族にとってどのような意味を持つかを中国社会の特徴として説明している。この部分は日本人にとっては、容易に推測できる側面だが、個人主義を旨とする西側近代社会にとっては最も理解にくい部分であろう。だが、林彪事件の焦点は、どうやら政治的激動のなかでの家族の分裂にあったごとくである。

第7章では、林彪ら9名を乗せたトライデント256号機が北戴河空港を強行離陸してモンゴルで墜落するまでの林彪夫妻、娘林立衡、息子林立果とその仲間たち、北戴河の林彪別宅、林彪派の4將軍（呉法憲、李作鵬、黄永勝、邱会作）、毛沢東と周恩来、これら事件の主役、脇役たちの行動の細部が描かれる。林立果の婚約者張寧の記録「歪んだ虹」（および直接のインタビュー）、林立衡・張清林夫

妻の「上訴材料」（未刊）、林彪の最も信頼するボディガードであった李文普（インタビュー）の行動の確認などから、林彪の行動の細部が描かれる。そこから浮かび上がるのは、林彪（そして林彪派の4將軍たち）はいわゆる「五七一」とは無関係であり、飛行機が国外に脱出することを知らずに「乗せられた」らしい事実である。信頼するボディガード李文普が空港へ向かう走行中の車から脱出した経緯は、ほとんどサスペンス映画である。

もうひとつ、林彪がクーデタを指示した証拠とされる「（林）立果、（周）于馳の指示にしたがえ」という林彪の「手令」は、どうやら林立果の偽造らしい。ここで2つの傍証がある。ひとつは、（父林彪をかばう）林立衡が繰り返し求めたにもかかわらず、周恩来はついに「手令」の現物を彼女に見せなかったこと（p. 172）。もうひとつは、葉群のアイディアで葉群、林立果は、病気がちの林彪のサインを練習し、事務の便宜を図ろうとしていたこと、それを林彪自身も承認していたことである（p. 172）。これは初耳だが、かつて毛沢東が林彪を「自分の女房に大事な政務をまかせてはならない」と叱っていた事実と符合する話ではないか。

第8章は結論である。革命家中の「ベスト・アンド・ブライティスト」の1人であった林彪が64歳でモンゴルの砂漠で死去したことが林彪自身の悲劇であることは言うまでもない。だが、中国政治研究にとって未開拓の「制度外的要因」を研究する著者からすると、これは「老いて被害妄想」の「毛沢東に対する忠誠」が「党に対する忠誠」と受けとられていた革命党の悲劇であり、これに導かれた中国全体の悲劇にほかならない。著者は林彪の悲劇は同時に毛沢東の悲劇であり、そのような毛沢東個人崇拜を許した中国の悲劇なのだという広い歴史からこの問題を考察することに成功したのである。周恩来は晩年の毛沢東に対して最も忠誠であったが、林彪が部下の將軍たちに対して、「周恩来を敬うよう諭していた」（呉法憲のメモ）という証言は見落とせない。「林彪が毛沢東を敬い」、「敬愛する毛沢東のアイディアを現実化するために努力していた周恩来」に学べという指示である。毛沢東が鄧小平を評価して、

「政治面では劉少奇や周恩来よりも優れ、軍事面では林彪や彭德懷より優れている」と評価していたエピソードも面白い。毛沢東によって自殺未遂あるいは死に追い込まれた羅瑞卿や劉少奇、そして幾度も批判された周恩来などが、それでもなお毛沢東を畏敬していた「革命第1世代の心情」を著者のような第2世代はほとんど理解できないが、その磁場あるいは呪縛から自由になったからこそ分析を本書の地点まで進め得たのである。

<追記> E-mail で問い合わせたところによると、著者は1995年にハワイ大学から Ph. D をとり、現在はバージニア州ノーフォークの Old Dominion University の Assistant Professor である。

(注1) 写真の内容は以下のとおりとなっている。

- (1) 林彪と毛沢東、1930年代(『人民画報』1971年10月号 17ページ)。
- (2) 抗日軍政大学で校長としての林彪、1937年(『人民画報』1971年10月号 28ページ)。
- (3) 林彪と周恩来、毛沢東、1967年(『人民画報』1968年3月号 32ページ)。
- (4) 林彪と呉法憲、邱会作、李作鵬、天安門広場にて、1970年10月〔『文革博物館』2部 1995

年 410ページ)。

- (5) 林彪と江青、天安門広場にて、1966年末(『文革博物館』2部 1995年 428ページ)。
- (6) 林立果、王炳章空軍司令と調査旅行する林彪、1970年7月23日〔『文革博物館』2部 1995年 422ページ)。
- (7) 葉群と李作鵬、邱会作、呉法憲、黄永勝、長城にて、1970年7月(『文革博物館』2部 1995年 422ページ)。
- (8) 林彪と葉群、天安門広場にて、恐らくは1969～70年(『文革博物館』2部 1995年 414ページ)。
- (9) 1971年9月13日航空機事故の結末、モンゴル(『文革博物館』2部 430ページ)。
- (10) 林彪の筆跡「立果、于馳の指示にしたがえ」(『文革博物館』2部 1995年 430ページ)。
- (11) 林彪のクーデタ計画書といわれた「571工程紀要」の一部(『文革博物館』2部 1995年 427ページ)。
- (12) 林彪、江青反革命集団の公開裁判における邱会作、呉法憲、江青、黄永勝、陳伯達、1980～81年(『文革博物館』2部 1995年 594-95ページ)。

(横浜市立大学商学部教授)